七婦しき

911.3
ナ

越後

ふゞき草

二麓園
村上 由章編

序

夫天地開けしより萬物あり万物ありてより
其理絶りて其理終りてとゞまるかりんやされば小法にて
三越ありて中にも後越は大州にして南は越中に隣りて
堺川あり北は出羽に並びて鼠ヶ関を限られ紀經
万里をもつて東は信濃上州の山々つらなりて
しかも海へ西は海原漫々として佐渡粟嶋の二洲

七不思議略解

一御神楽嶽ノみかぐら

蒲原郡小川ノ郷ニアリ風清ク月明カナル夜嶽上ニ金石鼓竹ノ声アリテ神楽ヲ奏スルカ如シ故ニ御神楽カ嶽ト云

一關太山ノ七ツ坊主

頭城郡ニアリテ妙香山ノ續キ也申ノ刻ニ至レハ忽然トシテ僧形アラハル何レノ影トモシレル事ナシ

一難波山ノ八ツ成瀧

頭城郡ニアリテ信越ノ堺山ナリ未ノ刻ニ至レハ瀑布アラハル遠方ヨリ見ユレ𪜈近クヨレハ見ル事ナシ

一如法寺ノ風火

蒲原郡如法寺村ニアリ地中ヨリ自然ト火ノ出ル家二軒アリ囲炉裏ノ隅ニ石臼ヲ居ヘヲキ其穴ニ竹ノ筒ヲサシ筒口ヘ火ヲカサセハ忽火出ル光明火氣ツヨクシテ陰火ニアラズ故ニ薬鑵ヲツリテ茶ナトヲ煮ル然レ𪜈筒ノ口焼ル事ナシ筒ヨリ筒ヘ火ヲ分ル事宛モ筧ノ水ヲ分ルカ如シ此村ヲ妙法寺ト云ハ非ナリ又此所ヨリ十里ハカリ北ニ

柄目木(カラノキ)ト云村アリ爰ニモ風火出ル

一 黒川ノ臭水(クソウヅ)

蒲原郡黒川ノ郷舘村ニアリ臭水ノ油湧出ル所数所アリ往昔天智帝ノ七年夏五月越国ノ献可キ代油薪之水土ヲ国史ニモ載タリ又同郡新津ノ山中ニモ臭水ノ池アリ池方三間バカリニシテ油ハ皆岸ニヨル見ル人高声ニ念仏ナト唱ヘ或ハ手ヲ拍地ヲ蹈ハ中央ヨリ水ノ逆立テ涌上ル事甚奇ニシテ黒川ニ異ナリ

一 鎌鼬

越后ノ国イツレニテモ山野又ハ居所ニ限ラス老若男女ノ差別ナク面頬手足時トシテ太刀ニテ切タル如ク肉ノサケル事アリ尤疵ノ大小ニヨラス筋骨ニ障ナシ血モ多ク出ス又格別ニ痛ム事ナシ古キ暦ヲ黒焼ニシテ付レハ不日ニ愈ユ是ヲ鎌鼬ト云カヘ太刀ト云ハ僻(ヒキ)説ナリ

一 海鳴

越后ノ海時候カハリノ節カ又ハ雨ノ催サントスル時潮ノ音山ニコタヘ地ニ響キテ宛雷ノ如シ俗ニドウ鳴ト云傳ヘリ因ニ曰ク唐土ニモ水底ノ琴声。頓河。晡時。僧火。筧。油泉。海上鳴。風狸。等ノ説諸書ニ見ヘタリ是等ノ奇越後ニノミアリテ他邦ニモ多

キモ亦奇ナリ

二麓園 由章撰

御神楽嶽にて

笛吹てさへ夜の合すかゝる嶽　新発田 豊井

霞の幕に掛る佐保姫　由章

未往も雛の段目をそへつき几　桃仙

草庵のうちを厚き徒文　八味

意は浮き蓮の錦を常なる　枝節

雨の後急を寄くに晴て　秋鳥

業の戸れ月影白く浪まさし　衆芳

たその所を年れ秋　依之

関太山七ッ坊主　水宗

花みし桜ふてもらし七ッ法師　為龍
山をかすミの身越て晴し　由彝
若父より御免仲宮へ詣でして　似竹
孫介となりし手ふくろの褌　千湖
青丹よし奈良をむかしの京なれや　飛鴒
多よ竹ふ家の曜ひ事あり　素后
只むかし月まてふ徳を秋とて文し　雛花
白ふ木犀桜風のおと　蝸牛

雑波山八ッ成瀧　新深

暁く日の行る八寸滝の新涼し　文苑
岨宰府は大宰の牛　由孝
筆頭とも種ふさきて菊の香　公圃
長ひ廊下よ扉く灯火　湖明
めつらしき恋を来てもまたかし　文器
瑞藻さきへ絵馬の奉納　蕉華
澄みまた月よ枕のかり寄道て　彭川
須磨もの外そ乗ふ秋　市仙

如法寺風火

新津 夕探

燃出る火れ影凄しきらく次　夕探

世を旅の身乃月を歌ふ也　由章

象潟や割此く詩の韻次第　藍水

名残ある山名のうへ山　自来

ろ日乃紅葉さやく環の音　江楓

鹿を呼ぶ深山に徹ル大嘷　湘東

坊さんの家のさかの此母子とも　何夕

級の橋祇乃まもし　花錦

黒川臭水

臭水の油や葉れ草いきれ　燕 文雄

畳う室の咲競ふ百家争　申章

見盤乃相みふるて雁りれて　松泉

海棠揺れら蘇と割るる　陰中

汲時ぞよれよて船を出し月見　文英

とよふ擱幅もの也寺のぬ　緑枝

合点して婚も廓へ月の秋　花兄

忠義の二字をえらくぬ松　二葉

鎌鼬

堀之内 徐々房

辻風に躓く坂や鎌いたち　中菴

引板の聲しきりに行もしき　何堂

送行は胸の月さへ流るゝか

旅の縁とてしれとおもふ若　雲甫

いとしくと抜れ小刀の瘡けさも　暁花

雪さへうしや寺山かけの里　鳥保

六宿の立まに近し鎌の霜　可未

八王子を抜て群居のおもひ　亜鳴 素風

海鳴

村上 秋

海鳴やあら浪は秋を告けける　壷宿翁

俎板し侍市のさかりを　由章

若ひ名は今でも桜紅葉　黄裳

節句のみの鹿うる春　桐杵

𣷹月あはれはえもいはれぬ　仙路

七堂伽藍すてゝ紫の戸　函谷

笠挽て咲そらひまき唐津焼　杉渓

埃り掃まる素秋の立　嵐仙

諸國集韵 到来順

木からしや野分より思ふ秋のうち　美濃北方 古梁坊

三河蝶やさくらけふ咲桜より　子洗

世を安し此行柳をみつゝ鳥の子　但里

猿の子の別れて揺ふ去日こゝろ　大垣 由益

女子ともにあたましまひる柳かな　桂花坊

見えしやまさぐさ四月の新かな　伊尾 梅二

若葉の目波をわすれて飛かな　杉荷

きくしとするやいかさ白ふり絲　岐阜 方義坊

白魚や眼をつゝ見ゆふ世れつき　晒柴

人ありそ咲やいのち山さくら　上有知 寧曲

幾千蝶の新や桃猫のめさへ仰　鳴桂坊

よの思ふところ似たる月自る月　神戸 玉芝

淋添手鶴の雨を青ふ竹　池田 千町坊

杉風も木かしとに名さそし　世村 一青

涼り火はらうし涼し窓の音　舟木 羽花仙

夏乃月やよの門くもらかし　六ノ井 文梛

との杏を木魚やむかれは蘇鉄かな　伊勢 香名 此漣

月ハ西り鶏頭(?)や秋乃風　（尭蕗）蒿庵

風よ吹けとさゑて明の月　三千丈

草(?)ゑの山めくりけり神しくれ　（浜妻(?)）素龍

若むしり梅よ嵩(?)けて春遠し　蟻(?)堂

鯉(?)焼の絹しおつるや柿乃蔕　秋紅(?)房

味噌汁よ浦まもの味や秋の風　（バリ一 赤松(?)）青牛

須磨(?)吹のけて月見や帆けむ(?)　琴吹

春(?)一つ笠に涼しや田草とり　（鏡杜(?)）如風

岡(?)と出る家(?)棟けつ屋の月移(?)　素卜

湯(?)入や風呂敷しけハ銭二百　（浪波 大久保(?)）素丈

しくれハ志くしぬれるしく出れしゑ(?)　青羅

御堂(?)と晴る雲哥川や牧の銘(?)　（阿波 卜(?)）蕉苑

大雲(?)を空に花の袂ふ世界こふ　（柿京(?)）把翠

牧方の銘(?)喰ふ秋まや郭公　（小松(?)）冠里

深(?)緑く柿の睫(?)る春日この神(?)　（少方(?)）苓波

生キ倦の子き世や売も二日灸　（川崎）文十

恋猫や寄居(?)ら来て瞬くら　（イヨ 小野(?)）素英

白魚や子をと出す水いに路(?)　北可房

年のくれよ訪ふ人もなし釜の沸　土佐大川 雨洗

汲先きし池の流るし若さかな　京都 琴水

志つかしてゐるさくらし子の笛哉　伊予宗山 柏雨

鶯の出れハら合れ作やきの風　芸話

家買て遠のれハ裏よ梅の花　杓伍

鰻掛や命めてて纔くく四　松浚

素人ハ分ふ分らし持かくし梅り　長門萩 紫石

腰て落る之間哉れるか小松し　赤関 羅風

折おしの生てて帰く梅の恵　坐翔

乞れけや小萩かへて殺しさし之　豊後日田 二月居

尾花植く日数し凄さ読せ分、　雨芳

春風や小松かへの砂ほうり　筑前福岡 芳枝

子れ一ッ都く似ぬ花野うぬ　肥後熊本 百童

之さすりに名れ尽きし枯野うふ、　此君

京さとや葉屋す葉れ百住つす　肥前長崎 宗呂

福屋の灯や風紫の香に動く　蘭畝

風さへて街の方ゆく隠見かり　京坂柳浦 語山

惊しや雨すうるとえれの露　出雲松江 碩獅

清流の雫いさゝか水玉の角　楚石坊

あやめ葺けや捨し梅もなし　尾張名古や 米亭

蛍の糸灰となりし扇かな　茶涯

網戸から月影敷く河辺の夜　箕行

夕顔の花も蔦葉をさかしけり　筑前 産 五中

早苗を植て吹く風の流れ哉　几由

若緑や柳の雛よはし見えき　佐渡川原田 丈山

野の中より蕎麦畑し枯尾花　玉芽

新壁し遠山をし我詠めけり　上野沼田 五凉

さゝ芦ぬまを啼や行く子　武蔵 楚石坊

住吉の狭の釣や森の中　其楽

須磨月はあけて見れば春の風　紀逸

鰹汁や浮きまで浮世の新　一之

さし汐は草を歯なく草の中　雨蘭

川まや風も嫌ひき馬の上　駿府 嵐二

森るかの帆柱もまたつゞく　篁丞

おちれば衣のもてなし道の記　吉見 野松

麦藁の道のかげりし時鳥　柳宜

名月やかくに家くもなく明し　佐渡 仁左 古道

梅咲て鶯老く秋のゆふ　馬年

芍薬や日数かゝぬ花盛　梅雅

無理に引清水ハ人に労多し　きまね

うまりハ早れ見まへり庇揺子　白石 乙二

道に干汎掛く銀理や名残り　出羽米沢 紅二

待宵の網戸明れハ蝶とまり　巾露

揺られぬ風の果るゝぬ今の月　若芝

山を出く海よ春ありほしきれ　日根 岸左信

裏町の扨を待さえぬ砧かな　町 里杏

夕立れ従んでも松の雫かな　可童

月新と云て秋しる山家哉　看酪

木隠見し星れ明ミけさの雪　猿花

鷺の笹しあたりいたる洗仟鶺　和巾

明て後舞れ出たり山さくら　瓢夜

紙衣の周にちなむや網代守　一萩

蝶ぶくや枯れ松の日を抱く　鼎

花咲て去人を追てかな哉　麦曙

あさり倭て篠をきるゝ大燈心　石秋

船の荷まて積こんてきりくす　涼羽

打燈のうしろハさひし秋の暮　栂水

まれ角にうしろむきけり案山子　蹈梅

夜の月嶋田もみえて大井川　仙鯉

里ありにけりや世路の揚ミ雀　山露

海山や非代まての月乃秋　春水

焼るにも炭さくれのまちかな　花蔟

若草も抱いはるゝ名は初秋　女 之保

待よりや常ハ七得しき錦のふる　女 江野

空剃てきりぬ西林寺の月　露洒

夕涼の馬まて捨る月毛かな　露蝶

箕もて春待るてあつく嫗　瓢哉

鷲鷺や追ても又来る石乃上　玉芦

山五人三てんて見る秋の月　素鴨

松原も是月影やしきの入　崎松

隠家や戸叩くかれハあ影のこ　境

新うちや見ぬまの嘆まる　小国 夜水

うく揉まれつゝ使ふる堺ニ茶　女 小さわ
披かれし青き揃し篠のむも　三ケ田 瓢左
晒し枝もちつと寂しうれしめ此ぶ　泉岡 壺仙
てうち野に使ひ戻るに春の暮　栖考
咲きふと寛てゐるし紫よ甚　尾花沢 涼居
茶屋いまる縄張まての法くるは　以水
和露やさうかうもきれ上　金山 羽芳房
狩る峰て静まりかへる木立哉　大石田 玉松
可惜ふみ行くも云ての秋の暮　花席

先ッしと清りあらる清水かな　仙台 吟市
おもふれ花も泉や雪解川　院内 風景
追分を迷ひ出ますや桜かな　大石 如仙
さみだれや子をも帰みさ鳥は　如錐
庭やちらりの清世の葉くらい　土珊
石川や時雨る葉に紅杭　琴弦
氷とけて帆あひのさきみ哉　其白
菜の花や花あるて家一つ　蘭戎
葉や蔓を磨るり木芝垣　亀甲

まをふかし野馬の嘶に相無かれ　巴紅

おぼろ夜や谷川捜れ欄の声　其玉

草苅のてに咲て来る花菜かな　文芝

馬ちと寒く時女ちり大根引　以之

家のたしぬ絲の子忘れ菜いちこ　履橋

屋根ふけハ鶏も拍子や年木擲　酒田　柵糸

鯨突く舟や魚籠の備へ立　千糸

洞盥に夜あけもよりや初すゝみ　和吟

跡拾ひや葛も見えたる志れ色　岩二

ホうりしの吹きつけさる月夜かな　大山　華又

来の葉ふ散して流に風の音　季友

まつりし門ふちる此橋の兆　守谷

秋風や扉風の山乃遠写り　加茂　里松

磯山の波に影照るかゝるかな　浦脊

志ら萩や露ハ和の名残の垣　錦ヶ宗　照兮

梅さちる霞に茶んで晴くらふ　杉童

一さしまかゝる風を起して五の川　秋湖

花かしぬ松の緑や名上の月　花碎

わすれぬ命てまかり山さくら　麦文
人気の外に咲つゝしさ〳〵月　瑞木
初しぐれ恵川ヶいちにこそ〳〵し　保泉
噎(コフし)寒れ鶴の羽たゝきぬ　如舟
提ても見き人ちょん摂生の伽　文明
うらゝ春の夢に咲かり明けの嫩　蘭丁
しぐれや木の葉をかくして鵆　岸二
笛吹れ雲に近くや新名かり　文潮
忍ぶ人々旅子のなきあはれ　文亀

牡丹さく庭に小僧の彦若哉　五橋
明ぬせりれものたり白や夜の月　其諾
まつれの枝に梅乃匂ひの事　文擊
青柳の雨を尽くして見かぜ　和汜
がつまに出情さかぬ雨涼し　一箕
竪鐵つる月れあふや蟷蜂　湖路
枕しまん鶴の羽のむしやう涼し　兎子
虫啼や泥縁に鳴る影哀れ　子逍
雁宿に跡に乾きかり笠の雨　柳耳

舟引の縄よちゞれや芦の花　文鱗

月清や橋のきはより海の面　律苑

何となく夕日になりや田植る　杉宗

時こそあれ山は初さくら　五明

渋茶は花見の中川二日かな　流枕

新らしき笠よ清き流れかな　文里

名月や雲の晴行橋より　可橋

春風よ藍なき沖くる白帆かな　不深

雪の山の床よとなりぬ冬氷り　文郁

月影の及ばぬ隈を笛の声　卜柵

下涼み意の柳ろや梨子の花　如流

何となき姿に見えよ秋の色　可常

待時も久しい春の名残かな　急白

春雨や上戸は深の不作さう　琴雉

己うつ下手なるぬる原なるおもかげ　桃席

すみれ咲や上あしはらに花の春　琴雨

擬鳴や錦月見光秋鮭乃番　羽黒 竹角

川霧に月森をなるぬる水錦　翠吉

閼伽桶に小僧ねらひ木槿かな　山尓

流れ出ることは流しおけし見かな　汐田川　白香

山吹や唐りのこゝろを咲せて見　岸岑　子仙

朝かほや恵にそゝぬ如きの手　胡砂

梅さ咲れ側に居眠る老の角　竹里

桜(?)て関いこゝろれ流む枯葉哉　武后 新発田　一人

[illegible]掛の晩景をわらぬ雛子の声　桃仙

初むすびに風に節さらばいし牛　釈　閑度

花ならと居て朽咲のおそりかな　石岩　松声

手你よれる勤め通ふや市婦人　雪住

峠ゟ花や枝を二分の吉野山　紫錦

背丈入や総様と髪よりをきし　有英

子をおもふ眼ふや布れ雛　桃島

楽しさも又若れありて接木哉　依之

ことわりて雛にみぬく鉢そうき　几味

桃咲をたよりて野路の道しるべ　枝節

燈火の名のこりも牡丹れおかしかな　衆芳

摘りとる兆の眼や陽の枯柳　更視

蝙蝠やゆるる森くゝる夏の江　流然

今まての月の宿りしら露に　武門 向上人

こゝろなき花よおしもや梅の暮　仝

秋風やゝ狗のはさりを吹かへり　紫 細竹

柚の花はほろりと落る暮かな　蜩甲

芒萩にも鳴ちる虫の嬉所成　簸柱

ものゝ香も薫れは香は手向る秋の風　素后

鶯や鳥の囀りをとてまれあさけ　飛静

川風に秋の来て居る清祓かな　手湖

子のものおかさ梅のしけりつ春　鶯龍

みえも雲を出さりもあえぬ花秋は　益水

戻さ因よそ結ふ名残なる嬉しかな　自来

陽さ枝よ垂しれ色も落葉かな　江楓

又ほとゝかと気りれて棕ゝの春　湘东

一時の蕾さへあるに百日紅　花錦

冬枯て裾のみしるひ柳かな　夕探

高よ眠り風手折ふく梅の春　鶏暁

数の身よかゝる森花や思れさき　行鳥

水音も枯て山路のあつさかな　其交

淡路も隠るゝほどもふゝしや虎か雨　美明

扇子帰や飯の椀のき所　鳥榜

きぬしの夢も日やかなの床　何久

母もとりに旅あそびや鉢かゝり　江流

薫ふりうる先虎あをし桐の花　何方

吹風のありけんさる芭蕉ふ　都山

気よ枝ふさうれしや若葉かゝ　由之

雛さんの灸も気にかゝらふ　孟暄

人も加ふ花くりとも柳かな　歩東

涼しもの猪まちるむ　菊後

絵描の尾　後白

鉄炮も声うり　此虹

橋うられたろにそって若き郷　約江

庶の山路の　侍友

枯荻を味あき風のさわりかな　二渓

きり油やよ去の風　椎鳩

寒さうら雪を埋ちや不二の山　艾擢

降らに折の香やはける風の音　一柏

絹雲やくらふ旅宿の勤め哉　小沢戸 時習

繋きふい糸もなるん柳髪　舟山

積をき開おちやおうらしの出入さ旅　布川

かけ水の月よしはなら景さこ哉　其併

おもかし山彩らしろよ桜哉　小向 文友

箴きもし思ふや虫つきもえろう　揖川 沮陵

枝川へ親うけてやう柳哉　幸田 桃岡

竹植てふくらし雀よ宥かさん　遠 泪英

若草や秋月を懐ろ烟さくら　文英

鶯の家秋骨やれしきき旅衣哉　花兄

汐汲の桶まもふや月二つ　崎鶴

毎き経ら身も捨あ魚ろ娘れ　新 二葉

川節の寒さと案内やここ合雪　隆伴

下戸のみも月見らうし新涼ん　緑枝

家一秋のゆき名さぬや里の春　松泉

ちうくさ寒や娘子まる吹きと　文雄

初雪やきことかうきれ山も無し　化城坊

川杖やふもしもちれも白し　東桜房

卯の花やおほ水のぬましき　吉田 杉良

朝晴や月細く光る雲の山　兵庫 湖仙

花ちりつもるのある世や山比良　三条 泉も

雪の松や独もむかし念の一とまる　呂見

寄生の体よかしるや手爪の竹の雪　呂竹

蕨ぞ竹やうろの飾く柳の風　省糸

晴れてまて雪をまてるあをとち　勝斎

梅ぞ何屁てでくまり西の庭　坊居 佛邑

旅立や日和の窓やそれに曙　起雨

夜光の松落しあり行もとに　白夜

まだ晴や菜の花の里の市ゆり　古狂

京蕨を人の信くのふ雨の蛙　里仙

秋の雲や見ゆる山樺山　佳文

嬉竈をとかして右の坂まさぶ　龍二

名月やうしと思ひぬるまで　長岡武門 春来

鞠世の枝未の被ぞ清されたり　止芳

女廉子の柳の緑や雪の雨　産月

粟のほの米実いりて家かこし　雲桜

多ゝ秋の旅もけふ名のりハ暮かゝり　雪溪

松風や船遊よの維の髪　雲花

葉くれに家も久りもなし山さくら　南水

月うふし生海よ踊る魚の鱗　晦日

着さかんて雨乃うらすうかれ　播里

梅ら乃やあまりに白ふ朧月夜　琴月

斗の鐘おそかは門の月あかり　錦水

何荊て馬よ喰せん花野かな　松宇

縞麻の衣へもくれ夕へかな　旭之

無條りして白越の味ハ清のかな　其文

帆をわけてあれは凪あり秋の夜　納暉

石鉢り磨きふかすや花露のむ　手翁坊

眠りききんとして落る露の味かな　圭止

半露に雲の松ふ音松かな　楢川

百姓の妻田へて落る夕陰を　徐草

夕虹の行ハ果さきさし大の山　再雅

雨ふれて織の業とる月夜かな　顧之

山住やかんこれなよふ人を　千年　乞月

きのふけふ風小庭や春の艸　三交

ある時や絡筆をけいきしの峰　小千谷　冬樫

誘ふ路や荒れよる馬の綱よ鳴　玉芝

知りるや楠の香添ふ舟乃坂　仲有

萱や垣乃おもてを人通り　荘阜

梅ちりて鱗流るし水川の角　維新

秋ゑ月を友よ山田の鶴路かな　楽茶

朝は降き着そをぬ衣で牡若　梅窓

花をまき掛けやちん孫桃　堀内　八熊

待や月や花今ろしき咲乃音　恕白

晴るゝや朝月の朝つる雲や山　魯江

物問ん花の木下の風帰児　卜来

柳から出て行春の常ろふ　季孫

房見て枝の月之ゝ旅の句ひ　楽後

八流の西に京へらもしやそのふ声　女　ます

暖や巨燵出かゝ余所の猫　雲甫

氣の弓乃寒ふ治りふ　暁花

珍味や山家と出る琵琶法師　可来

花けふはちるのちらずや水車　浦夕

早乙女や植うる田に[illegible]　何童

[illegible]　素風

青梅の[illegible]雨[illegible]　梅吉 庵丈

[illegible]　素白

[illegible]合川の[illegible]　可来

傘に[illegible]　来雨

蝶の[illegible]三千坊の豆腐[illegible]事　中嶋 菜陵

蛙[illegible]の[illegible]　文虹

猿や[illegible]一秋[illegible]別世界　安枝

萱[illegible]　晩平

千草は馬も嚔[illegible]　呉溪

蝶の尾[illegible]の[illegible]　巴夕

[illegible]梅の[illegible]　似菓

[illegible]仁[illegible]卿[illegible]　花隆

猿の[illegible]木の[illegible]　雪江

菓の花[illegible]小[illegible]　彰川

秋さひしやまちなくに火をともしけ　公圃
一の森り雁ぬるや秋の声　文器
ほし織や月の出汐に鳴千鳥　水童
足とめてきけハ止けりきりきりす　湖明
秋されや足をぬかれて草に露　元明
柳から蜂よらふや露れなる　市仙
涼しさやちらりかかりたる松の雨　女 歳戸
くらひとて汲れ出てや川の水　元童
笠ふみをとめして竹風の所涼し　文考

風や色はし赤き紅葉所生　文花
掃よせて篝に焼ふ小もろね　横瀬 窓月
麦蒔や蒔りの昆さ畠やう　松氷
名もつつれ所さらふの更衣　阿水
時よりを雨にあるかれなり菊　可及
今そ月かくしまれは猶しあれ　淑月
かなりては一ト雁の行頭巾かな　かゞ 倩元
嫁さ膝を抱ける雁子のたちあれ　虎哲
路きふる往合の清かう可奈　河清

庵措て何をさへらん年鵜　か木　吟之

初霜や浅ら刈しけすゑ五十鈴の流　不石

雨乞や欲しきに降りしも　曾川　舒白

碁の友は夜寒き宿ふけるに　川鳳

八景を寄にて見てゆく冊の綾　其把

それもの[?]戸も此竜鈍[?]遅に　寸紀

稲妻や竹[?]屋の窓放[?]宿　山治

名月や家もしき[?]つく指　新井　加笑仙

川形に晴たる朝ふ筆ら那　文化

菫咲や泊ら俤捨し庵の跡　紀孝

此の中や味藁[?]も彼岸[?]　花孝

月の影は當りて[?]ふ形　左橋

より合て袖となりて[?]桐借屋　村松　為中

咲れ夏包むり雛子の春[?]　得辺

笹の葉に汎[?]春の宮　氷鯉

皆承の[?]枝ふ[?]　中村　秋浦

行恵を夕日は移し[?]ふ　秋里

春らぬを世の答や枯の花[?]　黒川　蕪巴

野わけ山や茶紙荷ふ行にゆるゝかり　津月 梧伴

竹庭もつくれ荷る喜りも本　鳳池

寺し菊や月にされたる秋の冬　李明

日暮てもまた鈔らす萎の花　塔谷 初運

ちる雨や竹に集る山し雇　湖舟

稲舟やいふにもあらて月の友　悦菖

颯と風よ鈔てるはしもの峯　羽十技 宣恭

翁ころや畠は中よ嘘とい　雨条 松聲

先鶏は鵆ら浮しれ殻うえ　乙 些柿

ちる花に鶏はた鶴に嫁入る　蘂北 為水坊

蓮行て露○出てたる清水かな　梅屋

石曲風は條二丈や初さくら　仙二

しくれや降るゝ流て石蛤の影　渓平

江湖寮の綿よ鶏て穂蒔に　如翠

掛もみなめて扇や雪の笠　言橋 京濱

捨やさの上綸し波の綿　東岡

冰絆や身をとくめ引縄手　向井条 元耕

春らてぬむしむや花の名けしさ　岩舟 秋 起文

菜の花に庵ある扶を汲の哉　荘舟

涼実に来るに親うしきれさゝ哉　一菜

墨するんの京にいらんや花れ雲　瓢哉

富士野つゝやおろして虎か雨　一湖

お店の床明り細し竹佑　流長

おそ降しい雲を捌きてみる此月　芦滴

稲ゝみよの中も雑多り山ゝ雀　和口

降らせ花の咲まで春の雨　秋水

釜のふる志けしともせて入り哉　口染

此わたりやむむ宿にあらはけ　姪北丁　松声

往人のうろうろ涼し門柳　花庭

あり春とま遠き山路や雁遠さかる　文枝

歸庵待猜

ゑれ紙店の七不思議ともふるし住吉まうてゑ
はらへれとも浮跡を志る人稀なれはむかしの
花咲ける法師ありけるは初めにかられて二葉園の花由章
古稀をとこゆ鈎ひきを顧みかの霊運もときを及
らし

院備の杖に袴もうけし花の孫栄て雑くらさ
速に炭焼かゝれしハいのつらさうんと笑ふに
月さへも日さしかくて渡も月の半案の春にに
手せやりきして辻遠をみるの御屏を待ぬ

杜上
新

七夕の秋を問うや旅もと　止一仙
籠よりしき月の出遅し　由章
普請場の松の木内れハ田めさし　月海
算嘘なりし思案まつり　一止

来ころにやりて秋の暮そ止す　仙路
急や角とそやさき物忌　桐枠
懐ぬるよしそれゆゑのやよしと　如水
舟の出るまて人をさらせ　春眠

ウ

積りふる見ゆる樽下尋ぬと付て　押風
霜降来し翁の立ぬ竹の枝　藍州
客ぬよ門口の待ちの縁かな　月笑
厠へも火を焼く夕奉　花流
又飛ひにさしかへりて雲の払　林雲

二里の山路に録七文切　文鵬
旅に蓑をつゝる青葉かへん磨　壽升
若葉に交はる秋も我まつり　枕流
月の出る隣子に揃ふ竹の影　一路
待しめ空に青き四の緑　黄裳
細道をとつけ言の葉をとゝろふし　古梅
一息を休めて山姥のふく　梅興
公事済て記し烟る花の山路　巨龍
胡葱の香に包む汁飯　梅林

隆くまひとつあるまん生々念仏　賢淺
名月は良うる待ちつゝ須山上　春霄
思ふくくとゑのぬ雨夜の参ゝ西　一楊
紳に折し出現乃秋　如錫
此運よい矢路の左右に拍れ子し　弓月
先かくとゆる双六の鞍　常宗
ちりとく鐘の音とてゝ飛を　岡明
隙済し出たるありけるの光　肇行
梁の戸の影に庵水影に放されて　倚樗

ものうきわきはたまなりて　影笑

家の内出して飛脚に振られ　條園

風の隠りつかひ付纏　雅皓

待宵月は鏡臺山に出るらん　一路

雄ゝしい粟も稗は豊年　虚舟

二ウ

身に入る鶉をこの秋買ひやらせ　花然

禅を垣にかけて行かれ　梛里

むつくりと立し後の宮籟に　斗箒

捨わる向をとりて出神す　栖た

草庵に八的ゆらして嚔する業　鹿栄

笹編垣を佐穀の紋　乙英

まとをあてと切に浜に関の前　文虹

そうろに花ゑみは谷川　梅江

踏まへても撲りて〇てさうて松の色　許水

小俊かくらく大くたりよ　韮之

さ總に懐の名な書仕上　颯志

独りしてつきおる酒を遣て　有斐

八こうに月にけしきにて花の香　嵐山

三オ

富士の気色に似る山もなし　守米

爽かに霜をすれて年も未保　麟兒

子や人の関に二文の丈あり　可保

千ねども捧に餘りし候晴れ　如常

代ておきる秋枝の大ま　蘇深

おそろしい哀を意森に濡らしと　林溪

奥義に文趣るは無候　梅窓

米代に赤るや了書る旅客　二洞

気ぬるく馬に迫りきる程　耳洗

置土のなしうるあるの照りよると　蚓夕

梅硯かさんとすって紅條　有二

服納の見舞にけさも伯母見て　孤岸

温純の褸に二階掃除　林英

初汐に泊れ絵らし巌し也　春江

もんうに月南に居　奇岸

三ウ

菜堀に咲しを送来の戸あかし　捨風

羽織の打目紫尾出す　其柳

言切に乂る法門のまでも　玉壺

きえ志ゆへる笛かはしまる　菊路

衣の香のそれと志きまて浅てまて　柳志

そらおそろしき立ておりへと　雲波

ウラ
備らくかり見も種よ打　秋月

師走もは言子にられの月　桃水

新月よ守る深りされ搬の雪　子代

月出るさすよ深きさふてを　窓桂

剃條よ見るとけるかる竈の石　春宗

あさちは君親多れ文近しく　可然

咲にけり雲井はなれに目覚され　水鉢

僕子明るハ座敷へ下の躰　花友

十三
なかぬうち暮よ頁後の月見衆し　可笑

虎生きそっと宋ふる荷　聚之

蕎麦と皆様寿よ出来はつる　錦松

公家御前ハ御来山本　一川

桃灯を借りされとし馬をかし　新姿

されもそふらよ見るぬつかり　如英

浦あるき釜かり葛麦の煮ふ深け　栄章

はらはらと雨の催し引恵　緑倚
怖(ヲト)してもさうみ特の生捕れ　雪貢
下をのふ祀るると淡法よふる　風州
大窗を知らてむかしの鶴かより　芳州
絹築の火乃かけるる風破先　硲扇
すき妬る昂きに月の暈かしさ　九江
鋤路をまてのあさいみをすて　利竟
温(ナウ)泉をあれは山の堺論　明湖
花と天窓を蟠(ワケ)あまやふし　有雉
雪隠に居らも志る紀織り合ひ　富山
挟てられて垣よ海る家　松和
しらし路を隣とみしらと紀士のもら　和友
急を格してしてれハ居さよ　柳芳
花れ香も疑絶よ納めて慕ふよ　松隠
不易の志とを告ける誉　巣仙

右百韻　一順

各詠

さく毎に梅し植し鉢の木のし樹
より暮れ乙夕れい

秋

梅咲くと余所営に住りけん　止一仙

思ひ出れ月の中宿や郭公　、壺石

真枝乃肩に掛けぬ山さくら　、月海

乃仏手や枝に地かれ辿り道　、一路

山吹の影り不蔭の在りとれ　、古松

春の猫る姿をまつ記柳ゝ雨　、水蛙

雨そゝや竹に添ふし涼しさよ　、一止

もゝ宗さや岸の夕日に振ふ魚　武門 桐枠

紫刷毛の露や富士の夕気色　仙路

豆腐や海士の豆腐のうらに咲　京蛾

口切や床に構をは切根　玉川

金屏の露は皆よけや秋の雛　文鵬

みゝ振りや芝の虫みる不真中　巨龍

山茶花や尺渕ぬ香の来て振ひ　函谷

荒野行馬の尾よりて胡蝶かな　如水

花の香おもてにうつるのよ清しけり　杉林

日の影も見え深し菜畑　吉来

松涼し並床して不為旅も会　嵐山

米洗ふ娘らうしぬるさ川　柳風

草の笛よむしろふや浦の秋　香眠

物さひ首も脚に尖らか虫　春江

しらつゆや雲のしらけ月のかけ　林泉

娘の代を捨て聞く雪の礎に　草鹿

刀研ぐ水よあるらし其のれる　一橋

氷の下を月の流るゝ池川かな　花流

すゞしさや障子明れはよその森　肇竹

淋しさの限を知れとうら秋の暮　嵐庭

年の戸を田し添かやおなふ月　奇峯

堪忍やゆふべの雨に焼漆（ホワタツニ）　安橋

卯の花よ枝久遠き細人に見え　弓有

月の入添追ふて杂し子鶴　文虹

口紅の柄ね移る清水哉　虚舟

頃なや若葉搖るれ足の跡　揺風

海広し雲やちゞに一しく秋　不老庵　黄裳

声しくも乱しり野や秋の月　梅與

白雲は済出る秋に呼子鳥　藍州

路らるに広済く夕の露なれ　倚樗

飛ぶ身の二つ迄咲て秋さぬ　寿升

下萌や下鶯に路あれ土の父　枕流

弓を袋人を岳帳に能挟れ　斗賀

もとかしさ道の乾きや秋りれ　新笑

苔橋も広さ枯れ釣しきに　其文

世渡りやハ気をよそに娯さう　菊市

夕結たらぬ桜のくくやかゝり花　際周

鐘の声急ぎつ明り済を聞る花　雅皓

病抱き肌よらぬしさ給ふ家　有斐

新茶煮るいふへの未れ香しくれん　玄貞

噂はゝ寒く集り梛の花　松栢舎　松隠

堀一ツ橋に捲ちや雪の竹　如瑞

篭うし挟ふ呼ぶや五月雨　月笑

川辺済を風よりつけ時鳥　芳園

一ふさも晴の引清や深くおん　眷肖
まつりし又汲うへる素桃哉　菊然
こしら秋を歩行にまかせやりの雨　其栖
花見にこゝたる菴の住居かな　以中
新茶の代になるまて牡丹か那　柳芳
傍にゑしはまちつくし水菜売　可保
松茸や乾ひ出して日八分　有維
山寺や冬になれては郭公　如英
木綿の雛の名なり鶴千　柳た

名月にや高ひの手まて見て寝る　原洗
木のうしれ吹やむ松やうし楽　松和
花嵐のさし篠や馬の拍子さん　風例
ほとゝきす山気淋し江の月秋　（天あらし）嵐仙
月落て千鳥帰なり松の露　乙英
乳世ひとつ送る門や秋の雲　明胤
旅の名は休む新らく秋木立　闌明
梅か香と川くる怨の杖か雨　雲波
卯の花よ蕗子く知し明の月　玉岳

釣瓶それなりにこさきの角　有之

子苗に川手に碎るや秋の月　琴之

大川の事や房のさめの色のみえ透稍　梅英

人声もと三日のまいろく居乃月　如常

園ありし旅をえせてや梅る居　庵栄

実割し松風吹けて梅花見月　春棠

稲妻晴れ続を作るや海月より　梅江

一もとや涼風のうく因種ゐ郷　許水

海士の子のまむらしぬれやまきの風　元友

さゝ音と苔をうすゝ園の雪　錦秋

買ふ人や額の花まりしつきりと　萩淡

野の宮の雉子火田し松浮く月　和交

雨ふるや伊勢へいや行きつく　秋月

出る又へや母も出て帰く笠風雪　可笑

折人も淋しきもる山も磯の寺　窓桂

菜ありしうちむしらなるやふの月　桃水

山里や寄の中ふるや錦のつくゑ　梅窓

明行月をも振るや子苗より　冨山

ゑの花や来る都のふかさく　可然

春雨や柔日に眺る山乃兒　利貞

蕗出る子の程ありしきれの雨　麟兒

日の柳を入江に追て汐かゝり　梅渓

こゝ路あらい花のこ吹けまちの風　立代

ゑさ春も咲残りてや蕗の花　出浅居 桃里

八々千の茅持させり柿のむ　流岸

たつ鳥は羽にまちるや穴の義　蛙文

万能は後也ちやん出づる生　菊路

田侍く菜ぐふしぞや子ふ苗取　柳志

風の影月吹くれ青し　栄貢

造る子も念佛おゆや雪佛　十川

侍きさ子に纏りて安さ紙衣かな　雪貢

千坊のむらしおりや山さくら　新姿

のゝ冊ゝ豆を断つゝ田捨馬　杉山 九江

夕物例くもみぬやの梅の梅　大庭 二洞

引鐘を照へてさけて月涼し　小川 緑綺

蝶挿や節穴朝く奥女中　、寄竹

こよひ持る人もなかりしけふの月　上州 啓扇

名月や霧もこかさん萩すゝき　坪根 及花

雙吾合太湖

跋

こゝに思へハ世しの秋の頃師まかりて門下に落て
手を倒おかり給れや吾は二葉園忠章居士は
に逢のもと集を撰して恩を拔し志ら文は爾を
篇集せんやと立ひ立小しよ七奇の流まらしかれと五の石
なるら石のおこるら環研給らそして明かなかるよう癸亥
およし卯月のはしめ老営の筺をかりそめに百里獨歩の
路程をと云ひ然きをとに入りおるをとこうそ和くま

深縁ありて文雅の士や好客ハさらなりて業を示祀
久しく同ひ洗濯さし渡りれバ露しるてかれら同窓をたはされ
歳月のすぎ来る后なりしを光陰精金に行徒の序を従け
縁に百韻をと詠ひぬさいおもし泥竹稿めて剞劂の以序よ
なんとれ志らぬあれバ時人を行く先の健をしれすく覚へお
これで下卯のと六月廿日此家し讃かへぬかく呈きおれ
やうしきのすゝるをる者て読ぐ七旦て以て申さされ
とうれの徹思衍かうれを杜稜含宗おりさたし歌たし
く今や微力をと合せて本を稿を稜考して師の志を重ん

さんでしまりて其儘にて魚魯ハ誤りもとれなし入れ稀
ある猿ぬ待りぬるハ山の白家をとなり嘯背を参らるの
なかるへしされて卸思入と校るの俗よ賤かるす
えゆるし給へて予らふ

文化十癸酉八月

吾為窟

嵐仙

居諸貫

七ぬしきれて集りて世に不思議ともてはやされの
来より山河即海千草万木人の起居動静に酒飲
物食まてもいつれか不易流行ならむは言ふまし
とは寂しうるゝ花かも実を結ふ　例に芭蕉
を師とする門の流派して新の由章なれはなるへし
於いて先達をなくしむ人をもて此集を成せる
かくさなれ校合はあるし　蕉庵の序にて志

を継きてよし来しても跋に一句を添よとなれは
椎の庵のふるめかしきにかくや絶えす

咲　袖の色かはれても
紫陽花（アヂサイ）は一樹かな

一楽庵
陶里

一楽主人

陶里

第 6399 受入 昭36. 3. 14

蕉門書林

皇都寺町通二條

橘屋治兵衛梓